
髑體の微笑み

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

髑髏の微笑み

【Nコード】

N6026B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ゴールドラッシュの時のアメリカカリフォルニア。ディックはある若い女と結婚することになったがそこで次々と怪異を見ることになる。その原因は。フランスの古いお話をアレンジしました。

第一章

髑體の微笑み

十九世紀中頃、南北戦争が終わって暫く経った頃のアメリカの話である。この時この国はまだ若かった。

一言で言うと西部劇の時代であり実際に西部ではインディアンや無法者達との戦いがあった。騎兵隊がいたのもこの時代である。そうした意味では案外近い時代の話であるのだ。

カルフォルニアに人が集まりだしたのは金が見つかってからだ。それを知った多くの者達が一攫千金を夢見てカルフォルニアを目指した。その中には様々なものがいて実に雑多であった。その雑多な人の集まりの中にディックという若者がいた。

彼はフロリダ生まれだった。ごく普通の農家に生まれ子供の頃から家の仕事を手伝っていた。そのせいで逞しい身体をしていてまだ幼さの残るソバカスのある顔に青い目と茶色の髪がよく似合っていた。彼はジーンズを穿いていつも鉱山で金を掘っていたのである。

彼もまた一攫千金を求めてここにやって来た一人であった。

「最近何かこの街も人が多くなってきたな」

鉱山から街に戻ってふと呟いた。

「肌の色が違うのがいるけどありや何だ？」

黄色い肌の自分達と同じ格好の連中を指差して同僚に問う。

「インディアンと似た顔だけだよ」

「あれはチャイニーズだぜ」

「チャイニーズ!? あれがが」

「ああ、海の方こうから来たな。連中も金が目当てらしいぜ」

「へえ、じゃあライバルってわけか」

ジャックは仲間からそれを聞いて呟いた。

「金を掘るのの」

「まあ連中は他にも色々やってるけれどな」

「色々ねえ」

「線路を敷くのに使われたり商売をやったりしてな。色々と器用だぜ」

「俺達よりもか」

「俺達より上なんじゃねえのか？そういうのは」

同僚は彼にそう答えた。

「手先も器用だしよ。身体は小さいがな」

「よくわからねえがここにいるんだな」

「ああ」

「まあインディアンじゃなきゃ俺はどうでもいいけれどな」

ディックはぶっきらぼうにこう言った。

「肌が黒かるうが白かるうがな」

「心が広いつてか」

「違うな。俺の先祖だつてスコットランドから来たらしい。最初からここにいたわけじゃない」

アメリカは移民の国である。そこにいる者の殆どは最初からアメリカに在るわけではないのだ。そうした意味で実に特殊な国なのである。

「そう言つたら同じなんだよ、黒人も俺達もな」

「まあメキシカンは違うがな」

「あれは奴等が悪いんだよ」

ディックは言う。

「アラモはな。俺はその時まだガキだつた」

「ああ」

「親父はメキシコの連中と戦つた。それで腕に銃弾を受けた」

「名誉の負傷つてやつたな」

「そうさ。アラモは全滅したらしい。親父はそのターキーと戦つてな」

ターキーとはメキシコ人の蔑称である。

「それで怪我をしたつてわけさ。あれはあいつ等がアラモに攻め込

んだからだ」

「まあな。アラモは残念だったさ」

これが当時のアメリカの考えだった。実際はテキサスはメキシコ領でありそこにアメリカ人達が入植してメキシコ側がこれに対処したらアラモに立て籠もり、そうした事態になったのである。

米墨戦争は実際はアメリカの侵略である。なおこの時にテキサスと共にアメリカに割譲されたのが今彼等のいるカルフォルニアである。「で、今俺達がいるカルフォルニアもアメリカのものとなった」

「それで俺達が今金を掘っている」

ディックはそれに応える。街はもう薄暗くなるうとしていて次第に夜の闇が迫ってきていた。

「それと一緒に人も寄ってきたな」

「どつちにしろ金が動いてるよな」

「ああ」

「掘ればよし。掘れなかったら」

「今までの賃金で何かするか」

「何をするつもりなんだい？」

「そこまではまだわからないな」

ディックはまだそこまで考えてはいない。

「店とか開くのもいいな」

「他のことはどうだ？」

「つつてもまだここには何も無いぜ」

まだまだ荒地しかない。当時のカルフォルニアは荒々しい未開の地であったのだ。

「とにかく今は働くだけだな」

「そうか」

「所帯も持ちたいんだけどな」

「それが一番難しいかもな」

「おい、そりゃどういう意味だよ」

同僚の言葉に口を尖らせる。

「そう言われるのが嫌ならさつさと彼女を作るんだな」

「ちえっ」

舌打ちをしながら同僚と別れて酒場に入る。そこで仕事の後の一杯としゃれ込むつもりだったのだ。

木で急ごしらえで造られた店はかなり荒っぽい。砂埃が前に舞っていて店の中も埃の匂いがする。暗くなりかけている店の中には鯨油の匂いとそれで照らされる灯りがあつた。その中で荒くれ者達が酒を飲み、カードを楽しんでいる。西部でよくある酒場の姿であつた。

荒くれ者達の顔は様々だった。白人ばかりではない。黒人やヒスパニック、そして中国人の顔もある。西部はこうした雑多な有様であつたのだ。黒人のガンマンやカウボーイなぞざらだったし中国人達も鉄道の施設や金を掘る為にここにいた。ヒスパニックも同じである。

いないのはインディアンだけだった。彼等はアメリカという国にとって倒すべき敵でしかなかったのだ。元々いる筈だが外敵となつていたので。そしてここにもいない。狭い居留区に押し込まれるか命そのものを奪われるか。どちらにしろアメリカという国にとつて彼等はあつてはならない存在だったのだ。

「よおディック」

カウンターにいる目つきの悪い男が彼に挨拶をしてきた。

「今日はもうあがりかい？」

「そうさ、ジョニー」

ディックはニヤリと笑つてその目つきの悪い男に返した。

「そつちもそうなんだろ？」

「ああ、今日は上々だったぜ」

ジョニーは笑つて彼に応える。笑つていても目つきは変わらない。

「かなり掘れた」

「そつか、じゃあもうすぐ億万長者か」

「いや、その前にやらなくちゃいけないことがあつてな」

「それは何だい？」

「実家のお袋へのな。仕送りだ」

「ああ、カンサスのか」

「ここ以上に何も無い草原だけのな」

「そこにいるんだったな、あんたのお袋さん」

「そうさ、ずっとさ」

「ジョニーは言う。」

「俺はそれが嫌でここに来ただけれどな」

「で、金を掘ってる」と

「これは前にも言ったな。まあそれでだ」

「ああ」

「今日は奢るぜ。どうだい？」

「悪くないな」

「ディックはその言葉を聞いて面白そうに笑った。」

「じゃあ一杯やるか」

「ああ」

二人は椅子を並べて飲みはじめた。安い、しかも埃の味にするバーボンだったがそれでも美味かった。二人は心地良い仕事の後の一杯を楽しんでいた。その時だ。後ろに一人の中国人がやって来た。

「おや」

ふとディックを見て声をあげた。たどたどしい、どうやら覚えたとの英語である。

「これはよくないな」

「！？よくないってか」

ディックもその言葉に気付いた。そしてその中国人に声をかける。「チャイニーズの旦那、何か俺の顔にでもついてるのかい？」

「ああ」

その中国人はまずそれに答えた。

「その前にな。俺の名前を言っておく」

「ああ」

「俺はリーという」
中国人はたどたどしい英語でそう話した。

第二章

「その名前と顔は覚えてくれ」

「わかったよ。それでリーさん」

ディックはそれに応えたうえでリーと話をはじめた。

「俺の顔がどうしたんだい？」

「あんたの顔に不吉なものがある」

「不吉なもの！？」

「ああ、近いうちにえらい目に遭う。だが心配することはないな」

「！？」

ディックはリーの言葉に首を傾げさせる。どういふことなのか話が掴めないのだ。

「それからは逃げられるな。だが用心しておけよ」

「何かよくわからねえがわかったよ」

ディックはそれに対してやや矛盾するような返事を返した。

「やばいことが起こるから気をつけるってことか」

「そう考えてもいい。わかったな」

「ああ、わかったぜ」

そして頷く。

「じゃあそうさせてもらうぜ」

「安心していいがな。じゃあ飲むか」

「ああ」

そのままリーはディックとジョニーの中に入って飲みだした。仕事の後のほんの一時の休息の時間であった。それから数日後リーの話を忘れようとしていた頃にディックは思いも寄らぬことに出会った。

鉦山の飯場に使われている宿屋に若い女がやって来たのだ。赤毛で波がかった髪に琥珀の目を持つ綺麗な女であった。

その眼が特に印象的だった。輝きが強く、何処までも見透かす様

な瞳であった。その瞳が妖しい光を放ち周りの者を見るのである。それが男達の心に残った。

「いい女が来たよな」

「そうだよな、あの黒い目がな」

男達は早速その目に捉われていた。

「何かあの目に見られると」

「全部見透かされているような気持ちになる。不思議って言えば不思議だな」

「そうだな」

そうした話をしていた。その中にはディックもいた。とりわけ彼の変わり様は大きかった。

「あの女の名前何て言うんだ？」

仕事の合間の休憩で鉱山の入り口で休んでいた時に同僚のソノーラにこう尋ねる。彼等は今ブリキのカップで安物のコーヒーを飲んでいた。

「あの女のか？」

「ああ、聞いてみたくなってな」

「おいおい、まさかよ」

ソノーラはディックのその言葉を聞いて悪戯っぽく笑う。

「御前まさか」

「そうだって言ったらどうなんだよ」

ディックは悪びれずにこう返してきた。

「どうするんだ？」

「何だ、本気なのか」

「本気も本気さ」

ディックはまた言った。

「だからこうやって聞いているんだよ」

「そうか、本気なのか」

ソノーラにはこれが少し意外であった。

「御前がねえ」

「それで名前知ってるか？」
「ディックはまたあの女の名前を尋ねてきた。」
「知ってたら教えてくれよ」
「エミーっていうらしいぜ」
「エミーか」
「ああ、名前を覚えてそれから……だな」
「競争相手がどれだけ多くてもな」
「ディックは決心した。その目に強い光が宿る。」
「彼女は俺のものだ、俺のものにする」
「コーヒークップを片手に宣言する。」
「絶対にな」
「まあ頑張りな」
「ソノーラはそんな彼に声をかけた。」
「応援はするからよ」
「頼むぜ。それで見ないなよ」
「また笑ってこう言う。」
「俺が彼女をモノにするのをな」
「ああ、楽しみにしているぜ」
それからディックはことあるごとにエミーに声をかけるようになった。最初は嫌がっているようだったエミーもディックの押しに遂に負けてプロポーズを承諾することになった。プロポーズを受け入れさせたその日彼はあのバーで御機嫌だった。
「どうだい、俺はやったぜ」
隣に座わるジョニーやソノーラに対して自慢していた。
「彼女は俺のものさ。だから今日は祝いだ」
「飲むっていうのか」
「そうさ」
ソノーラに伝える。
「とことんまで飲むぜ、いいな」
「ああ、好きにしな」

「今日は付き合っ^てやるか」

ジョニーも悪い顔をしてはいなかった。友人を素直に祝^う気持ち
がそこにはあった。

そこにはリーもいた。ディックは彼に気付いて声をかける。

第三章

「よおりー」

「ああ、話は聞いてるよ」

リーもにこやかに笑って彼に対して言った。

「婚約したんだってね。おめでとう」

「ああ。ところで前の話覚えてるか？」

「不吉な相のことか」

「そうさ。それはまだ俺の顔にあるかい？」

酔いの回った赤ら顔で尋ねる。

「どうだい？見えるか？」

「ああ、まだあるな」

リーはそれに応えて言った。

「しかも近付いている」

「外れそうだな、それは」

今幸せの絶頂にある彼はそれをすぐに否定した。

「残念だったな、外れて」

「そうだったらいいけれどな」

だがリーは深刻な顔を崩してはいない。

「一つ言っておく」

彼はそのうえでディックに述べた。

「首には注意しろ」

「首にか」

「そうだ。何か顔にそれが見えるんだ」

ディックの顔を眺めながら言い続ける。

「どういうわけかはわからんがな」

「そうなのか」

「まあ安心しろ」

リーは表情を穏やかにさせてこう述べた。

「危機は確実に避けられるみたいだからな」

「そうかい。だったらいいけれどな」

「しかし妙だな」

「まだ何かあるのか？」

「いや、あんたの顔に浮かんでるそれだけけれどな」

「ああ」

「こんなのは見たことがない。それは」

そしてまた言う。

「相当得体の知れないものらしいな。それだけは覚えておいてくれ」

「何かわからねえがわかつたぜ」

ディックはそれにまた前と同じ返事をした。

「気をつけるさ。それで今日は」

「ああ、わかつてる」

リーは元ののにこやかな顔に戻ってそれに応える。

「あんたの幸せに乾杯だ」

「そう、有り難う」

この日はそのまま浴びる様に飲んだ。したたかに飲んだディックはふらふらと歩いて宿舎に帰る。その途中で路傍にある石に気付いた。

「大きな石だな」

人の頭程もあった。そのうえやけに丸かった。人の頭に似ている。

「よお」

酩酊寸前だった彼はその酔いのまま石に声をかけた。自分でも半分以上訳がわかっていない。

「俺今度結婚するんだよ」

こう声をかけた。

「よかつたら来るかい？」

酔っていても石が言葉を言う筈がないのはわかっていた。全ては酔ったうえでの戯れであった。それはわかっていた。だが。異変が起こった。

「ああ、わかった」

「!？」

何処からか声が聴こえた。ディックはそれを聴いて顔を顰めさせた。

「何だ、誰かいるのか!？」

「何を言ってるんだ、今話し掛けてくれたじゃないか」

「っていうと」

「そう、私だよ」

声は石からだった。驚いたことに石が話しているのだ。

「な、そんな馬鹿な」

「おかしなことを言うな。自分から声をかけてくれたのに」

「おい、何で石が」

「石も喋るものだ。それよりな」

「うう……」

あまりのことで言葉が出せない。酔った頭であれこれ考えているうちに石はまた言った。

「楽しみにしているからな」

そこまで言うとならなる異変が起こった。その丸い石が。一瞬だが髑髏に見えたのだ。

「なっ！」

驚きの声をあげてしまった。だが次の瞬間には。石は何処かに消えてしまっていた。周りを見回しても何処にもなかった。まるで煙の様に消え失せてしまっていた。

「……飲み過ぎたかな」

ディックはそう思った。いや、思うことにした。

「寝るか。幾ら何でもこんなじゃまともに動けやしないしな」

そう自分に言い聞かせて宿舎に戻った。全てを酒のせいにして眠りに入った。それでその石のことは忘れた。そしてそれから暫く経ち婚礼の日となった。

第四章

鉱夫と飯場の雇いの女の結婚なので贅沢なものではなかった。街の教会で簡単な式を済ませただけである。その後は酒場で鉱山の仲間達に迎えられての宴会だった。当然主役はディックとエミーである。

「おめでとうさん」

仲間達が二人に声をかける。二人は今宴の中心にいた。

「今日はおなた達が主役だぜ」

「俺達のおごりだ。存分に楽しみなよ」

「ああ、悪いな」

ディックはエミーを隣にしてそれに応える。今日は手に持っているのはバーボンではなくワインであった。結婚の場だったので祝いの酒だったのである。

「しかし本当にな」

ソノーラが二人を見て言う。

「運のいい奴だぜ」

「そうだよな、こんな美人のかみさんもらうんだから」

「ジョニーも言った。」

「羨ましい限りだ」

「まあ運は昔から悪くないんだよ」

ディックは鶏の肉を焼いたものを口の中に入れながら応える。やはり七面鳥ではない。

「何処かでな。助かるんだ」

「それはいいことだな」

「その運のおかげでかみさんもか」

「ああ」

そう言われて顔をさらに綻ばせる。酔って赤くなっているからそれが余計に目立つ。

「神様に感謝しているぜ」

「そうだな、感謝しとけ」

「幾ら何でもつき過ぎだぜ」

「やっかみもかなり入っている言葉が周りからかけられる。そんな彼等に料理が次々と運ばれて来る。質素ではあるが量も種類もかなりのものである。」

その中にはスープもあった。人参や玉葱をたっぷりと入れたスープだ。それが溢れる程に注がれた鉢ごと運ばれてきたのである。

「今度はスープか」

「おっ、いいなあ」

ディックはそのスープの匂いを嗅ぐと目を細ませた。

「俺これ好きなんだよな」

「ああ、そう思ってたよ」

「まあどんどん飲めよ」

仲間達が勧める。それはエミーに対しても同じであった。

「あんたもな」

「飲んでみてくれよ、美味しいから」

「ええ」

エミーは相変わらず表情がない。その表情のない顔でそれに頷く。鉢の蓋が勢いよく開けられる。

するとそこからスープと共に何かが出て来た。それは何と人間の生首であった。

「!!!」

そこにいた全員が凍りついた。髪の毛がスープの中に漂い虚ろな目で新婦を見ていた。まるで何かの恨みがあるように。

だがそれは一瞬のことだった。次の瞬間にはスープの中にはそんなものはなかった。ただ美味そうな匂いのするスープがあるだけであつた。

「お、おい」

ソノーラが引き攣った顔で静まり返った皆に対して言った。

「気のせいだったみたいだな」
「あ、ああ。そうだな」
「ジョニーがそれに頷いた。」
「見れば何も無いじゃないか」
「そうだよ、何も無いよな」
「そ、そうだな」
「皆もそれに頷く。今見たものを確かに覚えているからだ。」
「ほら、旨いスープがあるだけだぜ」
「また誰かが言った。実際にスープを皿に入れて飲んでみせていた。」
「こりやかなりいけるや」
「本当か？」
「ああ、飲んでみるよ」
「他の者にも薦める。」
「今日のはかなりな」
「ああ、本当だよ」
「薦められた者が実際に飲んでみて頷く。」
「こりやいいや」
「かなりな」
「どうだ？旨いよな」
「そうだな」
「御前もどうだ？」
「ああ、是非共」
「ディックは何とか笑顔を作ってそれに応える。」
「じゃあ一杯な」
「一杯なんて言わずに幾らでも」
「ほ、ほら早く」
「君はどうだい？」
「ディックはここでさりげなくを装ってエミーに声をかけた。」
「本当に美味しいからさ」
「いえ、いいわ」

エミーは青い顔でそれに答えた。それまでも表情がなかったが今度は余計にそれが顕著になっていた。

「悪いけれど」

「そうか、じゃあいいよ」

「俺達だけで飲ませてもらおうぜ」

「そうだな、これだけあるし」

彼等はその場をまだ取り繕う必要があった。だがどれだけ取り繕っても不気味なものは隠せないでいたのであった。そればかりはもうどうしようもなかった。

エミーはまだ暗い顔をしていた。それに見かねた者達が彼女に声をかけてきた。

「少し休んだら？」

「そうだよ、夜はまだ長いし」

女達がまず声をかけてきた。皆エミーの同僚か鉱夫達の妻である。その職場や家庭から安易に想像できるように皆結構荒々しい。

「ちよつとね」

「それで気分を落ち着ければ」

「はい」

エミーは青い顔のままそれに頷いた。そして今はそこを後にするのであった。

女達は彼女についていく。残ったのは男達だけになった。

男達はとりあえず生首のことは忘れた。そして飲みはじめた。

彼等は酒豪揃いであった。祝いでとことんまで飲んだ。皆酩酊状態になったところで彼等は散開した。後に残ったのはディックだけであった。

第五章

とりあえずまだ意識はあった。彼はエミーのいる夫婦の部屋に戻ることにした。

「エミーもまだ気分が悪いだろうしな」

ディックはふらふらとした足取りで歩きながら呟いた。

「初夜は無理かな。俺もこんなのだし」

そんなことを考えながら部屋に入って行く。部屋の扉を開けると真っ暗であった。

その中に大きなベッドだけが見える。そこにはエミーがいる筈である。

「やっと二人になったね」

ディックは部屋の中に入ってエミーに声をかけた。

「これからはずっと一緒だよ」

優しい声である。それに妻が起きていれば応えてくれる筈だったが、さすがはならなかった。

「残念だがそうはならないな」

「!？」

それはエミーの声ではなかった。というよりは女の声ですらなかった。しわがれた男の声であった。少なくともここにおいていい声ではなかった。

「誰だ、悪戯か!？」

ディックは酔いが醒めてくるのを感じていた。そして声の主に尋ねた。

「エミーは何処に行ったんだ、御前は誰なんだ」

「まあ落ち着け」

声はまた言った。

「そんなのではまともに話もできんだろう。まずは灯りだな」

「あ、ああ」

言われて少し落ち着いてきた。側のテーブルにあったランプに火を点けた。

これで部屋の中が明るくなった。そこに映し出されていたのはベッドの上に浮かび上がる髑髏であった。

「な……」

白い髑髏がベッドの上に浮かんでいる。ディックはその髑髏を見て思わず息を呑んだ。そしてその髑髏を見た恐怖によりまた酔いが醒めてきた。

「驚いたか？わしの今の姿に」

「驚くも何もないだろ」

ディックは髑髏に対して言った。

「これはどういうことなんだ。そして御前は誰なんだ」

「まずはわしのことから言おうか」

髑髏はディックに伝えてこう述べた。

「わしは以前君の奥さんの亭主だった」

「何だつて!？」

これはディックにとっては青天の霹靂であった。

「エミーが結婚していただなんて」

「やはり知らなかったか」

「初耳だよ、そんなの」

灯りの中に浮かび上がる髑髏を見ながら言った。そこにある影がゆらゆらと揺れていた。髑髏の動きに合わせて。

「彼女は。人殺しなのだ」

「人殺し……」

「人を殺すことにな。異常に喜びを見出す。そんな女なのだ」

「殺人鬼ってわけか」

「そうだ。おそらくわしの前にも何人も殺しているだろう」

「何人も」

「わしは村の地主だったがな。男やもめに飽きたところで彼女と知り合い結婚したが」

「殺されたのか」
「結婚して暫くだった。寝ているところを鉋で首を切られた」
「それであんたはそんな姿になっちまったのか」
「そうだ。これでわかったな」
「ああ、あんたのことはな」
「デイツクは答えた。」
「このままだと俺もそうなってたんだな」
「おそらくはな。どういう殺され方をされたかまではわからないが」
「髑髏は言う。」
「わしと同じ運命だっただろうな」
「殺されてたてことかよ。ん!？」
「デイツクはここまで聞いたところで気付いた。」
「そういえば」
「彼女か？」
「ああ、何処に行つたんだ」
「彼女なら逃げたよ」
「あんたのことに気付いてか」
「そうだ。だが心配はいらぬ」
「髑髏はカタカタと歯を鳴らして笑った。」
「わしはあの女の居場所ならすぐにわかる」
「そうなのか」
「左様。だから何処に行つても必ず追いついてやる。必ずな」
「しかし。あんたがエミーに殺されたなんてな」
「これがまだ信じきれなかった。」
「しかも髑髏になって」
「あの女はそれが趣味なのだ。人を殺してその血に塗れることを最も愉しむ」
「頭がおかしいのか」
「そうだろうな。悪魔に取り憑かれているかも知れぬ」
「俺はその女と結婚するところだったんだな」

「わしが来ていなければな。危なかつたな」
「ああ、そのことは有り難うな。ところで」
「何だ？」

「もう行くのかい？あんたは」

「ここに留まる理由はないからな」

髑髏は言った。

「すぐにも行かせてもらおう」

「そうか、じゃあ頑張りな」

ディックはそう声をかけた。

「自分の仇を取りたいんならな」

「そうだな。ではそうさせてもらおう」

髑髏はそれに応えて述べた。

「ではな」

「ああ。できれば今度会う時はこんな形じゃなかつたらいいな」

「ふふふ、確かに」

髑髏は彼の言葉を聞いて笑った。表情の無い筈の髑髏が微笑んだように見えた。

「今度会う時は天国だ」

「ああ、そうか」

「そこで会うとしよう」

「その時は飲もうぜ、バーボンをな」

「わしはバーボンはあまりな」

「じゃあ何だい？」

「ビールがいいのだ」

「わかった、じゃあそれと一緒に飲もうぜ」

「うむ、それでは」

髑髏はすうつと姿を消した。その後には影も何もなかった。ディックだけがそこにいた。彼はその揺れる影さえも消えてしまった髑髏を何時までも見ているのであった。

エミーは逃げたことになった。周りの者は彼に同情していたが本

人は至つて平気な顔であつた。

「よお」

そんな彼にリーが声をかけてきた。

「久し振りだな」

「そういやそうだな。何処に行つてたんだい？」

「ああ、一緒にここに来た奴の手伝いでな。店を作つてたんだ」

「店をか」

「国の食べ物だ。出来たら来てくれ」

「ああわかつた。清の料理か」

「美味いぞ」

リーはそう答えて満面に笑みを浮かべた。

「清の料理はな。ちよつと違う」

「そうか。それは楽しみだぜ」

ディックもそれを聞いて満面に笑みを浮かべさせた。やはり美味しいものという期待するのが人というものである。

「じゃあできたなら呼んでくれ」

「ああ、それにしても晴れた顔になつたな」

「そうかい？」

「あの不吉な相が奇麗に消えている」

リーはディックの顔を見て言った。

「危機は去つたな」

「そうか、それは何よりだ」

その危機が何なのかはわかつている。それを聞いたうえで顔を綻ばせていた。

「じゃあな。後は大丈夫だからな」

「ああ」

「店が出来たらそれから避けられた祝いだ。いいな」

「わかつたぜ。じゃあどんどん奢つてくれよ」

「金はあまりないがな」

「ちえっ、しけてやがんな」

最後にそんな話をした。そして別れる。ディックは不気味な髑髏にその命を助けられ不吉なものから逃れることができたのであった。

髑髏の微笑み

完

2006・10・1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6026b/>

髑髏の微笑み

2010年10月8日15時04分発行